巻頭特集

囲碁棋士

伊田 篤史

IDA ATSUSHI

史上最年少で本因坊挑戦中

4月7日、東京の日本棋院で第69期本因坊の挑戦権をめぐり、
ふたりのプロ棋士が競った。
ひとりは過去に6つのタイトルを獲得した山下敬吾九段。
対するは20歳になったばかりの鈴鹿市出身の棋士・伊田篤史七段（現八段）だ。
伊田八段はこの勝負を5目半差で勝ち、挑戦権を獲得する。
囲碁界で名を轟かせる新星を取材した。

穏やかな微笑みが印象に残るが、碁石を握ると表情が一変。気迫あふれる姿を見せてくれた

「囲碁の魅力は自由さ」と伊田八段。その言葉通り、次々と新手が生まれ、進化を続けている

アニメがきっかけで始めた囲碁 鈴鹿市出身の最年少挑戦者

2001年から放送されたアニメ『ヒカルの碁』は、囲碁の一大ブームを巻き起こした。19×19の格子の上に白と黒の石を並べ、相手の石を自分の石で囲む。研究されてきた定石はあるものの、置く場所の制約はほとんどない。そんな自由な遊びに子どもたちは夢中になった。なかには、アニメの主人公である進藤ヒカルと同じように、プロ棋士の道を歩んだ人もいる。囲碁界の三大タイトルのひとつ、本因坊に史上最年少で挑戦している伊田篤史八段もそのひとりだ。

「よろしくお願いします」と、朗らかな笑顔を浮かべて現れた伊田八段の年齢は20歳。小学3年生の時に囲碁を始め、プロ入りを決意した。アマチュア五段の父に教わりながら、ルールや定石を覚え、めきめきと棋力を伸ばした。「毎日3～5時間は囲碁をしていました」と話す。4年生で少年少女囲碁大会に出場し、5年生で6位入賞。6年生で日本棋院中部総本部の院生になり、2009年、伊田八段は中学校卒業とともにプロ入りを果たした。

1年目、順調な滑り出しを見せたが、2～3年目は黒星が目立ち始める。「1年目がうまくいきすぎただけです」と笑うが、勝つことへの執着心が足らず、ここ一番でプレッシャーをコントロールできないことが悩みだったそうだ。「4年目にようやくどんな状況でもいつも通り打つことができるようになったのです」と話す。

自分の打ち筋を発揮できるようになった伊田八段は、破竹の勢いで強豪を破り、ついに三大タイトルと呼ばれる本因坊リーグに入る。リーグ入りによって、四段から七段に飛び級昇格。同時期に、余正麒が18歳でリーグ入りを果たしたため、最年少記録とはならなかったものの、史上2番目の若さだった。

初戦は地元・椿大神社 1局ごとに成長する

囲碁の世界にはさまざまな棋戦があるが、主要なものは棋聖、名人、本因坊、王座、天元、碁聖、十段の7つ。そのなかでも、棋聖と名人、本因坊は手合数、賞金額、持ち時間が他より多く、三大タイトルと呼ばれる。江戸時代から続く囲碁の大家の名を冠し、1940年に始まった本因坊は、最も長い歴史をもつ棋戦である。

本因坊への挑戦権を得るためには、長い予選を勝ち抜かなければならない。関西・中部予選Bからスタートした伊田八段は、予選A、最終予選も突破。リーグ戦は最終予選から4人、昨年のリーグ戦上位者4人による総当たり戦だが、伊田八段は初めてのリーグ戦とは思えないほどの奮闘を見せる。張栩（ちょうう）九段に1敗したものの、他の実力者を下して最終戦を迎える。相手は全勝の山下敬吾九段。勝てば勝利。プレーオフという大一番で、半目差で20歳で史上最年少となる本因坊挑戦権を獲得した。

現本因坊は井山裕太六冠。25歳ですべてのタイトルを保持した経験をもつ、現役最強と呼び声の高い棋士だ。第1局は5月14日・15日に椿大神社で行われ、中押し負けだったものの、地元から多くの人が応援に駆け付けた。「友人や通っていた囲碁サークル「十星会」の人など、たくさんの人から声をかけられました。期待に応えられなかったのは残念ですが、大きな支えになりました」と感謝の言葉を口にした。前夜祭など初めての経験が多く、気疲れもあったというが、1局ごとに本来の力を取り戻し、成長している。

碁の自由さに魅せられて 面白さを皆に伝えたい

「囲碁は古くから進化し続け、今も新しい定石が生まれています。受け継ぎ、未来へと繋げていく魅力があるんです」と話す。取材後、6月4日・5日に行われた第3局では、過去の定石にない新手を繰り出し、早くも有言実行してくれた。「碁は自由で、無限の可能性がある」。その奥深さに魅せられ、碁にどっぷり浸かった生活を続けている。

現在も鈴鹿市内の実家に住み、名古屋市内にある日本棋院中部総本部に通っている。それ以外でも、自宅で常に碁石を握っているそうだ。他に趣味はないか尋ねた時、じっくりと考えて「ありません」と笑った。囲碁が何よりも楽しい。だからこそ、強くなった。実際に伊田八段が打つのは、攻撃的、挑戦的な碁が多い。解説とともに見れば、きっと初心者でも楽しめるだろう。そんな碁を見て、少しでも魅力に感じる人が増えてくれればと話した。

「考えていたより早く、タイトル戦を実現できました。1戦1戦大切に向き合い、タイトル獲得を目指したい」と今後を話す。国際棋戦にもどんどん挑戦していくという。鈴鹿が生んだ囲碁の新星は、いま日本と世界の頂点をめざし、輝き始めている。

囲碁は古くから進化し続けています。受け継ぎ、未来へと繋げていく魅力があるんです。

伊田篤史
いだ あつし

1994年3月15日、鈴鹿市生まれ。白子小学校、鼓ヶ浦中学校を卒業後、日本棋院中部総本部でプロ棋士になる。今年、本因坊挑戦権を獲得し八段に昇格。思い出の場所は、子どもの頃から通っていた「白子囲碁クラブ」

文／野村亮輔　写真／D-studio　デザイン／Beanstalk 白石純也